OKADA-ROOM Vol.17

美の道をしめす―教育者としての岡田三郎助―

会期 2020年6月6日（土）～8月30日（日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、1869～1939）の画業と人物を顕彰してきました。

岡田三郎助は画壇の巨匠であると同時に、偉大な教育者でもありました。約 35 年にわたり東京美術学校で教鞭を執るかたわら、本郷洋画研究所や女子洋画研究所などの画塾も主宰し、多くの若者に自身の知識や技術を惜しみなく伝授しました。とりわけ大正末頃に自身のアトリエを増設して開設された女子洋画研究所は、当時としては非常に珍しい女性に門戸を開いた画塾であり、岡田の開明的な思想が伺えます。

今回の展示では、岡田の名品とあわせて、彼に先立ち教育者としても活躍した小代為重・黒田清輝・久米桂一郎、岡田とともに教壇に立った藤島武二や、岡田が導いた有馬さとえ・甲斐仁代・古沢岩美ら後進の画家たちの作品を紹介し、岡田三郎助の美術教育者としての姿を探ります。

※★印は OKADA-ROOM 初公開作品

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1900（明治 33）	45.4×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵

本作は留学3年目に描かれたもので、同構図の作品が東京藝術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するということも学んだのであった。

2	^{あざみ} 薊	Thistles	岡田三郎助	1908(明治 41)	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------------	----------	-------	-------------	-----------	----------	----

第 12 回白馬会展への出品作。読書中に物思いにふける情景であろうか。女性の背後にはアザミの葉やキキョウが配され、秋の一こまであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する非常に鋭敏な感覚を見て取ることができる。

この時期、岡田は画面一杯を覆う植物の背景と着物をまとった女性の取り合わせを好んで画題とした。

3	清楚（少女）	Graceful Girl	岡田三郎助	1907（明治 40）	43.8×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	--------	---------------	-------	-------------	-----------	----------	----

カンヴァスの中からこちらをまっすぐに見つめる少女。髪と着物の輪郭はぼかされ、中心の少女の顔に視線が誘導されるように工夫されている。傾げた首やわずかに口角が上がった唇、瞳の中に描き入れられた光が、表情を生き活きと際立たせ、作品全体の甘い魅力を引き立たせている。当初は《習作（少女）》というタイトルがつけられ、1907（明治 40）年の第 11 回白馬会展に出品された。

4	少女読書	Reading Girl	岡田三郎助	1924(大正 13)	44.9×33.2	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------	--------------	-------	-------------	-----------	----------	----

うらかな陽光を浴びて読書を楽しむ少女の肖像である。彼女の髪型や洋服は当時のモードである洋装のそれで、新しい時代を象徴する女性像である。

岡田のアトリエの戸外で描かれた本作は、当時の女子洋画研究所の生徒をモデルに描かれた可能性がある。女子洋画研究所には、画家を志す女性たちに加え、手習いとして洋画を学ぶ富裕層の子女も多く通っていた。

5	裸 婦	Nude	岡田三郎助	1935(昭和 10)	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	------	-------	-------------	-----------	----------	----

1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。

展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和 15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。（佐賀県重要文化財）

6	坐裸婦（習作）	Seated Nude (study)	岡田三郎助	1913(大正 2)頃	58.7×42.6	コンテ・紙	館蔵
---	---------	---------------------	-------	-------------	-----------	-------	----

髪をすく裸婦を素早く活写した素描である。太い輪郭線で裸婦の量感を的確にとらえている。

コンテは顔料を粘土で固めた画材で、洋画家たちが下絵やスケッチなどに用いていた。岡田もこの画材を愛用しており、当館蔵の《婦人半身像》など、習作ながら完成度の高いコンテの作例も存在する。

7	少女像	Portrait of a Girl	小代為重	1929（昭和 4）	1897(明 30)	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	--------------------	------	------------	------------	----------	----

柔らかい光を受け、リラックスした表情を浮かべた女性。白と青のトーンで統一された画面には親和的な雰囲気が漂う。

青や紫は、白馬会派の画家たちが陰影表現などで特に好んで用いた色であり、黒田や久米から影響を受けた小代も青や紫の表現に熟達していた。他にも《近江八景》(当館蔵) など、青色を印象的に使った作品を残している。

小代 為重（しょうだい・ためしげ、1861-1951）

佐賀市に生まれる。旧姓は中野で、岡田三郎助の母方の遠縁にあたる。千葉師範学校の教員を務めながら、百武兼行（ひゃくたけ・かねゆき）から油彩を学び、1885（明治 18）年からは工部大学校（現在の東京大学工学部）で建築装飾を教える。油彩画を学ぼうと決心した少年時代の岡田にとってよき相談相手だったようで、曾山幸彦（そやま・さちひこ）の画塾を紹介するなどの助言をしている。

明治美術会や白馬会創設に携わるなど洋画家としても活躍したが、本来は機械工学の専門家を自認しており、東京電信学校では機械製図の助教授を務めた。

8	日だまり（くつろぎ）	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896(明治 29)	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	-----------------------	-----------	-------------	-----------	----------	----

岡田は 1897（明治 30）年から文部省留学生としてフランスへ渡り、黒田や久米の師であるラファエル・コランのもとで学んだ。本作はコランが《くつろぎ》(Intimité) というタイトルでパリのサロンに出品した作品である。

戸外で、白い服を着た女性が読書する様子が描かれる。木々の緑や、木漏れ日を受けた女性の肌やスカートが織りなす繊細な色合いが美しい。陽光があたって輝く明るい緑や白色のコントラストは、この時期のコランが特に得意とした表現であった。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
	ラファエル・コラン（1850～1916）						
	フランス・アカデミーの画家。アカデミックな描写に外光表現を取り入れた、穏健で上品な女性像を得意とした。日本の美術品や花々を愛した寡黙な人物で、弟子たちは彼を父のように慕ったという。コランの薫陶を受けた黒田清輝や久米桂一郎は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらすことになった。						

9	画室内	In the Atelier	黒田清輝	1889(明 22)	40.5×32.0	油彩・カンヴァス	館蔵
	ラファエル・コランのもとで洋画を修めるべく、同い年の久米桂一郎らとパリで共同生活を送っていた時期に描かれた作品。黒田の作品にしては渋い色味であるが、壁にかかる影やストーブの排気管などに、室内の柔らかな光が絶妙に表現されている。当時の留学生たちの普段の暮らしを垣間見ることのできる点でも貴重な作例である。						

黒田 清輝（くろだ・せいき、1866～1924）
「今まで脂（やに）っぽい暗い繪の中にあつた私は、黒田師に接して急に明るみに出たやうな氣がして來た。」（岡田三郎助「平凡なる私の修業時代」）
1889（明治 27）年、岡田は黒田清輝を知り、彼や久米桂一郎を通じて外光表現を積極的に受け入れていく。
黒田は 1884（明治 17）年に法律を学ぶためフランスに渡るも、画家になることを決意。帰国後は白馬会や東京美術学校で主導的な役割を担いながら、外光表現やヨーロッパの伝統的な絵画観の導入に務めた。

10	京都加茂川の景	View of Kamogawa, Kyoto	久米桂一郎	1893(明 26)	31.5×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
	久米桂一郎は明治 26 年（1893）年、留学先のフランスから帰国。日本初の洋画家の団体、明治美術会に参加するが、彼がかの地で学んだ外光表現、その明るい画面は日本の洋画壇に驚きをもって迎えられ、やがて多くの若き画家たちの心をとらえてゆく。本作は同年、ともにパリから帰国した盟友、黒田清輝と京都に赴いた際に描かれた作である。						

久米桂一郎（くめ・けいいちろう、1866～1934）
佐賀に生まれる。父は歴史学者の久米邦武。岡田三郎助とは母方の遠縁にあたり、生家ははず向かいであった。1886（明治 19）年に渡仏し、ラファエル・コラン門下に入り黒田清輝を知る。帰国後は黒田と画塾を開き、白馬会結成に携わった。岡田と帰国後間もない黒田を引き合わせたのは久米であり、岡田の画風の一大転換は彼によってもたらされたといえる。東京美術学校の西洋画科では、解剖学や西洋考古学などの授業を担当。その後画作からは遠ざかり、美術教育者として活躍した。

11	裸 婦	★	Nude	藤島武二	1924(大 13)	60.5×41.0	油彩・カンヴァス	館蔵
	藤島 57 歳、帝国美術院会員に就任したころの作品。本作もその円熟期の画風をよく示している。岡田より後にフランス留学に赴いた藤島は、同地でセザンヌやゴッホ、ゴーギャンなど後期印象派の作品に多く接した。闊達で力強い筆跡や色調で描かれたこの裸婦像からも、そのような後期印象派からの影響を伺い知ることができる。美術評論家の中村傳三郎は、藤島と岡田の画風を比較して「武二の剛に対する三郎助の柔」と形容した。							

藤島武二（ふじしま・たけじ、1867～1943）
鹿児島出身。はじめ日本画を学んだのち、洋画に転向。曾山塾（のちの大幸館）や山本芳翠のもとで学んだ。東京美術学校の西洋画科新設の際には岡田とともに助教授となる。1905（明治 38）年から文部省留学生として渡欧、フランスとイタリアで学んだ。岡田三郎助と画壇の双璧をなし、共同で本郷洋画研究所を運営した。第 1 回文化勲章を受章。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵	
12	若葉季節の記	★	Season of Young Leaves	有馬さとえ	1965(昭 40)	100.5×80.2	油彩・カンヴァス	館蔵

季節の草花に取り巻かれ、果物と花々が活けられた花籠を描く。植物は重厚な色彩ながら瑞々しさに溢れ、香り立つような生命力を放っている。家族の反対を押し切り、1911（明治 44）年、18 歳で岡田に弟子入りし、岡田邸に寄宿しながら油彩画を学んだ有馬は、苦勞の末、33 歳の時に官展で女性画家として初めて特選を受賞する。力強い筆勢の彼女の作品からは、女性洋画家の草分けとして生きた彼女の誇りや矜持も感じられるようである。

有馬さとえ（ありま・さとえ、1893-1978）
鹿児島市に生まれる。本名サト。子どもの頃から西洋画に憧れ、三宅克己の水彩画の絵ハガキを集めたという。18 歳頃に上京して岡田三郎助の弟子となり、のち岡田の本郷洋画研究所で学ぶ。1926（大正 15）年、第 7 回帝展に《花壺》を出品、女性画家では初めての特選を受賞。日高文子や牧野虎雄の影響も受け、ダイナミックな筆致で女性像や静物を描いた。

13	静物	Still life	甲斐仁代	1962（昭 37）	65.0×80.0	油彩・カンヴァス	館蔵
	原色をふんだんに使った色彩とリズムある筆致が魅力的な作品。赤の使い方はアンリ・マティスの作品を連想させ、壁の模様に見えるポップな表現は現代においてもなお新鮮に映る。女子美術学校で学んだ甲斐は、岡田からアカデミックな洋画の技法を修めながらも、次第に個性を花開かせ、伸びやかな筆致と色彩で独自の画境を拓いた。美術評論家の桑原住雄は、甲斐の画風を「鮮やかに、すきとおるように冴える色の共鳴と、即興的に素早くのびる暢達の感触」と評した。						

甲斐 仁代（かい・ひとよ、1902-1963）
佐賀市に生まれる。中国・青島の女学校を卒業し、女子美術学校（現在の女子美術大学）で岡田三郎助から洋画を学ぶ。1923（大正 12）年に二科展に初入選。満州や奈良、軽井沢などを旅して作品を描き、二科展や一水会展で活躍。「婦人洋画協会」の創立に加わるなど、女性画家の地位向上にも貢献した。晩年は荒々しいタッチと大胆な色遣いを得意とした。

14	伊達跡風景	★	Landscape of Date-ato, Shibuya, Tokyo	古沢岩美	1931（昭 6）	45.2×52.9	油彩・カンヴァス	館蔵
	古沢 18 歳頃、岡田邸に寄寓して絵画修行をしていた若き頃の作品。渋谷区伊達跡（現在の渋谷区恵比寿）の岡田邸の近所にあった病院の夜の光景を描いたものである。古沢は本郷洋画研究所でデッサンを学ぶ傍ら、欧州のような風景を探し回り、東京大学の構内や湯島聖堂などでスケッチを行ったという。本作もユトリロ作品のような雰囲気纏っており、本作を見た岡田は、「きみ、東京にもパリがあるんだね」と言って面白がったという。							

古沢 岩美（ふるさわ・いわみ、1912-2000）
1912（明治 45）年、佐賀県三養基郡旭村（現在の鳥栖市）に生まれる。1928（昭和 3）年に上京し、渋谷伊達跡（現在の渋谷区恵比寿）の岡田三郎助邸に寄宿しながら本郷洋画研究所に通い、油彩画を学ぶ。のち豊島区の「長崎アトリエ村」に拠点を置き、寺田致明、麻生三郎らと知り合う。また、ダリにひかれ画風を一変、シュルレアリズム風の前衛的な作品で注目を集める。1943（昭和 18）年から中国大陆で従軍、復員後も旺盛な制作活動を行う。煽情的な女性像や社会の不条理をシュールに描いた作品で知られる。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内 1-15-23
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp Web. http://saga-museum.jp/museum/